土佐藩ノ地割制度（其一）

小野武夫

緒言

日本ノ各地ニ存在スル田地割制度ニ就テハ夙ニ地方凡例錄ノ記者ニヨリ北陸其地ノ地方ニ於ケル慣行ノ概要ヲ記サレ、明治ノ初年ニハ地租改正ノ局ニ當レル人々ニヨリ二三地方ニ於ケル土地割換慣行ニ就キ深キ注意ヲ拂ハレ、新渡戸博士ハ今ヲ去ル二十數年前此問題ニ就テ說ヲ立テラレ、札幌農學校出身某氏モ各地ヲ旅行シテ此ノ問題ニ關スル材料ヲ蒐集セラレタリト聞ク。福田法學博士ハ其名著經濟史論ニ於テ本問題ニ就キ先入未到ノ說ヲ發表セラレ、明治十八年農商務省ノ調査セル『小作慣行』ニモ地割制度ノ存在ヲ語ル文字ヲ散見ス（此ノ『小作慣行』ニヨリ茨城縣下ニ地割慣行ノ存在セルコトハ牧野信之助氏、國家學會雜誌及ヒ文學博士內田銀藏氏ニヨリ紹介セラレタルカ、土佐ノ田地割制度ノコトモ此ノ調査書ノ南海農區ノ部ニ記載セラル）。其後中田法學博士ハ越後ノ地割制度ニ就テ周密ノ調査ヲ遂ケ、牧野信之助氏モ亦越後及上張地方ノ地割慣習ヲ紹介セラレ、栃內禮次氏ハ母校札幌農科大學ノ卒業論文トシテ『薩加賀藩ノ田地割制度』ヲ著シ福田法學博士ヲシテ『穗積博士ノ「五人組制度」、三浦博士ノ同名著ト合ハセテ此書ヲ經濟學ノ寶庫ト稱シテ溢美ノ言ニアラスト信スー多大ノ趣味ヲ以テ全篇ヲ讀シ依ツテ自家ノ蒙ヲ啓キ又タ新智識ヲ得タルコト尠ラス』トテ筆ヲ極メテ此書ノ學術的價値ヲ絕賞セシメタリ。余モ大正四年帝國農會ノ委囑ヲ受ケテ永小作慣習ノ調査ヲ爲スニ當リ愛知縣海部郡地方ニ行ハルル地割制度ノ梗概及永小作慣習トノ關係ヲ調査シ『本邦永小作慣行』ノ餘論トシテ掲載シ置ケリ。然ルニ只土地割制度ノ調査ハ皆地方々々ニ於ケル局部的研究ニ過キサルガ、文學博士內田銀藏氏ハ既ニ本邦地割制度ニ就キ精到ノ研究ヲ積マレ、造詣頗ル深シト傳ヘラルルト雖、慨ムラクハ研究ノ結果ガ刊行本トシテ社會ニ公表セラレサルカ故ニ吾人ハ唯經濟辭書ニ於ケル博士ノ筆ニ成ル『土地割換』ノ一章ヲ眺讀シテ僅ニ其渴ヲ癒ササルヘカラス。斯ノ如ク日本ノ割地制度ニ就テハ熱心ナル研究家續々現ハレ、福田博士ノ云ヘル如ク『此問題ノ他ノ何レノ經濟上ノ問題ニモ勝リテ精確ナル學問的研究ヲ經タル』ノ觀アリ。

割地ノ行ハレタル區域ニヨリ本制度ヲ分類シテ二ト爲シ得ヘシ、一ヲ一村落又ハ數村落ニ亘ル地方ニ行ハレタル農民合意ノ地割制度トシ、二ヲ一藩政治上ノ手段トシテ公認セラレタル制度トナス。我國ノ各地ニ存在シタル地割慣習ノ多クハ前者ニ屬セリ

ト雖、加賀藩ノ地割制度（栃内氏『舊加賀藩ノ田地割制度』）、琉球ノ地割制度（『沖縄縣土地整理紀要』）及ヒ壹岐、平戸（經濟辭書中内田榕士『土地制度』）ノ如キハ後者タル一藩ノ公認制度トモ謂フヘキモノナリ。

然ルニ土佐藩ノ田地割制度ハ加賀、琉球其他ノ地方ニ行ハレタルモノト異シク藩主ノ公認セル制度ニシテ、村ニヨリテハ明治初年地租改正ノ當時マデ繼續シ來レルモアリタルニ、今日マデ之ノ研究ノ試ミラレズ、唯明治十八年農商務省調査ノ『小作慣行』ニ於テ、此制度ノ存在ヲ記シ、明治十五年大藏省編纂ノ『地租改正紀要』ニ於テ極メテ簡單ニ土地共有ノ慣習ノ存在セルコトヲ記シ牧野氏カ國家學會雜誌ニ於テ此事ヲ一言セシニ過キス。土佐ノ國タル四國ノ南半ニ占據シテ太平洋ニ面シ、北ハ險峻ナル山脈ニ圍繞セラレテ四方ノ交通不便ナルカ故ニ學者ノ注意ヲ惹クモノナカリシニ由ルカ、或ハ史料紛雜調査困難ナルカ故ニ人ノ之ヲ敢テスルヲ欲セサリシニ由ルカ、何レニシテモ他藩、他地方ノ制度ト共ニ同一ノ興味ヲ以テ研究セラルヘカリシ土佐ノ地割制度カ今日マテ世ニ紹介セラレスシテ終リ、有益ナル資料ヲ空シテ紙魚ノ貪食ニ委シ了リタルハ殘念至極ト言フヘシ。

大正五年九月余ハ永小作慣習ノ調査ヲ續行スル爲メ高知縣ニ出張シ、一週間滞在シテ高知市内ニ存在スル古記錄ヲ蒐集スル傍ラ、附近農村ニ就キテ之カ慣習及由來ヲ尋ネタルカ、古文書ノ記事及ヒ故老ノ言ニ徵シテ、土佐ノ永小作ハ往時全藩ニ行ハレタル田地割制度ト關係アルモノノ如ク信ジタルヲ以テ、別ニ田地割制度ニ關スル記錄ヲモ出來得ル限リ蒐集センコトニ努メタリ。然モ今日トナリテハ何分ニモ資料散逸シテ索メ難ク、唯幸ニ高知縣農會長和田和氏、技師正岡周造氏、其他ノ職員諸氏幷ニ高知縣圖書館長兼縣史編纂主任中城直正氏等ノ厚意ニ依リ漸ク數種ノ稿本ヲ索メ謄寫スルヲ得タリ。聞ク處ニヨレハ明治初年某氏高知縣令タリシ時、縣氏悔古ノ念尚ホ旺ニシテ新政ヲ悅ハサルモノ鮮ラサルヲ觀、彼等ヲシテ速ニ往時ヲ忘レシメン爲メ倉庫ニ保藏セル無數ノ舊記錄ヲ三日間ニ亘リ燒棄シ、藩ノ史料ハ此時殆ント灰燼ニ歸シタルヲ以テ、農政ノ顚末ノ如キ今日之ヲ研究セントスルモ容易ニ資料ヲ索メ得ヘカラサルニ至レリト謂フ。然ルニ近年高知縣廳ニ於テハ縣史編纂ノ必要ナルニ着目シ新ニ機關ヲ設ケテ史料ノ蒐集ニ努メ、又山内侯爵家ニ於テモ數年前ヨリ家史ノ編輯ヲ思ヒ立チ、東京ノ本邸ニ編纂所ヲ設ケ編輯員ヲ置キテ事ニ當ラシメツツアレハ、必ス近キ將來ニ於テ完全ナル土佐史ノ完成ヲ見ルコトナラン。斯ル現狀ノ下ニ蒐集シタル余ノ材料ハ決シテ豐富ナリトハ稱シ難ク、唯此少數ノ資料ニ依リ土佐ノ田地割制度ノ研究ニ端緒ヲ開カントスルニ過キス、今試ニ余カ入手セル資料ノ目錄ヲ示サンニ

一、地割爛組法　稿本　明治十七年安岡百樹氏手記、海南中學校教諭寺石正路氏保藏

一、土佐ノ國地方慣習手引草　稿本　高知市地方裁判所保管

一、靈草簿縣書ノ部（卷ノ一、卷ノ二）　稿本　高知縣廳内縣史編纂室保管

一、地方大要　稿本　同前
一、舊高知藩田制概略（土佐ノ國群書類從第百四十）　稿本　同前
一、海南政典（全十七卷ノ內第十二卷）　刊行本　山內侯爵家保藏
一、長曾我部元親「百箇條掟」　稿本　同前
一、南路志　稿本　同前
一、土免定（文政元年）　稿本　潮江村役場保管
一、潮江村本田御矢倉帳（天正十六年二月）　稿本
一、潮江川ヨリ南地檢地（天正十六年）　稿本
一、大橋川ヨリ東本田分畝帳（天保六乙未年四月）　稿本
一、辻重忠著　野中兼山（明治四十四年發行）
一、小關豐吉著　十佐遺聞錄（明治四十二年發行）
一、幸石正路著　偉人野中兼山　刊行本
一、島內書藍著
此他土佐ノ地割制度ニ關スル參考書トシテハ
一、農商務省調査「小作慣行」「南海農區ノ部（明治十八年調査）　稿本
一、大藏省調査「地租改正紀要」（明治十五年刊行）
ノ兩書アリ、何レモ本問題ニ關シ重要ナル記事ヲ登載ス。

斯ノ如ク余ノ採訪ニヨリ得タル材料ハ豐富ナラス、加フルニ村ノ故老ノ直接教フル處モ彼等ガ父祖ニ傳聞スル所ヲ補綴シテ語ルニ過キスシテ當時用ヒラレタル文書ノ如キ殆ント之ヲ藏スルモノ無之ヲ以テ、茲ニハ唯以上列記ノ資料ヲ渉獵シ、他日精到ナル研究家ノ出テテ余ノ力ノ足ラサルヲ補ハルル時ノ到ルマデ、聊カ經濟史料ノ一端ニモトテ、本篇ヲ草シテ公表シ、江湖先覺ノ高教ヲ仰カント欲スルナリ。

一、土佐藩ノ田制一班

イ、長曾我部氏ノ滅亡ト山內氏ノ封建　土佐最初ノ領主長曾我部元親ハ所謂土佐七族ノ一人ナ

リ、夙ニ剛勇ノ資ヲ以テ身ヲ鄉村ノ小城主ニ起シ、戰國ノ風雲ニ乘ジ、四方ヲ攻略シテ他ノ六族(本山、豐永、安喜、山田、大平、津野)ヲ討滅シ、更ニ軍ヲ國外ニ進メテ覇ヲ四國ニ唱フルニ至ルヤ、夫ノ『百箇條ノ掟』ヲ制定シテ土佐全藩ノ內政ニモ相應ニ意ヲ用ヒ、隨テ地方農民モ漸ク一統ノ領主ノ治下ニ其堵ニ安ンスルヲ得タルモノノ如シ。中ニモ長曾我部氏ノ採レル兵農制度ノ如キ兵馬倥偬ノ時代ニ於ケル一種ノ民政トシテ後人ノ興味ヲ呼フモノナカラズトセズ。長曾我部氏土佐一統ノ業成ルヤ鄉村ニ一領具足ナルモノヲ置ケリ、此ハ一種ノ屯田兵ニシテ少許ノ土地ヲ有シ、自ラ耕シテ家計ヲ營ミ、又自ラ飼ヘル馬ヲ有ス。平居一ノ勤仕ナク且ツ儀式的ナル社交ノ束縛ヲ受ケス、且暮武ヲ講シ、筋骨ヲ鍛練ス。而シテ其出耕ノ際ニハ甲一領ト粧ト糧トヲ槍ニ縛シテ之ヲ隴上ニ植テ、一旦事アレハ直ニ之ヲ執テ軍陣ニ赴ク、其動作ノ機敏ナルコト斯ノ如ク、氣象又極メテ精悍ナリ、『治謀記事』ニ曰ク『元親君ノ時ハ今トハ違ヒ、凡ソ田地ヲ持テル者ハ皆侍トシタル者ナリ、兵ヲ農ヨリ起ス樣ノ仕道ナリ、出家社人ニテモ田ヲ作レハ兵ヲ出ス樣ニシタルモノナリ、是ヲ一領具足ト云ヒテ自分ニ鍬鎌ヲ以テ田地ヲ作レトモ具足一領用意シテ事起ルヤ否ヤ陣立スルコトナリ、秦主(ハタスシ)ノ時兵ヲ農ヨリ起スノ仕樣孔明ノ屯田ノ法ト同ジ』(野中兼山)ト。其後長曾我部元親死シテ其子盛親世ヲ嗣キシトキ久武內藏介ナルモノヲシテ國內ヲ巡リテ武士ヲ點シ、其名簿ヲ作ラシメシニ、老若合セテ九千七百三十六人ヲ算シタリト云フ。以テ當時如何ニ多數ノ農兵カ土佐ノ地方部落ニ在住セシカヲ知ルヘシ。此等農兵ハ後年長曾我部氏ノ亡フルト共ニ其地位ヲ失ヒ、生活ニ窮シタルタメ、互ニ結托シテ新領主ニ對抗シ、隱然一城廓ノ觀ヲ呈スル

ニ至ル。

太閤秀吉征韓ノ鴻業未タ成ラスシテ死スルヤ天下ハ漸ク德川ノ手中ニ歸セントスル政權ノ回轉機ヲ誘致セシガ、長曾我部氏ハ德川勢ニ組セスシテ西軍ニ加擔シ、關ケ原ノ大戰ニ於テ一敗地ニ塗レ、國ヲ追ハレテ漂浪シ、其後大阪夏ノ陣ニ於テ一族斷絕、遂ニ全ク滅亡スルニ至リシカハ、土佐ニ於ケル長曾我部氏ノ刷業ハ茲ニ全ク覆サレヌ。

長曾我部氏ノ後ヲ承ケ土佐ノ領主トシテ入國セシヲ山內一豐氏ト爲ス、山內氏ハ慶長六年正月八日海南ノ新領主トシテ臨ミシ以來常ニ幕下ノ政治家ヲ勵マシテ經營、事ニ當ラシメ、同家三百年ノ治績ノ基礎ヲ鞏ケリ。然モ當時百事未タ草創ニ屬シ、國內諸制度ノ如キモ殆ント前國主長曾我部氏ノ遺制ヲ襲用シ、未タ新制度ヲ立テヽ統治スルノ運ニ至ラサリキ。殊ニ長曾我部ノ遺臣ニハ新藩主ニ對シ異心ヲ抱クモノ尠ラス、彼等ハ曾ヲ前主君ノ部下トシテ多年戰陣ノ間ヲ馳驅シ、自ラ氣ヲ負ヒ、任スルコト高ク、加フルニ今ヤ給祿ヲ失フテ衣食ノ資ニサヘ窮シ、不平滿々遺ル瀨ナク新領主ノ政治ニ對シ妨害ヲ働クモノ少ラズ、山內氏モ此等浪士ノ處分ニ就テハ多大ノ困難ヲ感シタルモノノ如シ。藩政府ハ此等浪士ニ對シ始メハ高壓手段ヲ採リ、命ニ服セサルモノハ悉ク之ヲ捕ヘテ一網ニ打盡スルノ方策ヲ講セシモ、容易ニ不逞ノ徒ヲ剿滅スルニ至ラス、幾多ノ困難ニ惱マサレツヽ荏苒日月ヲ經過スルコト四十年ニシテ、寬永年度ヲ迎ヘタリ。